

# いのち生かされる

## 魂の祈り【前編】

「心」というものはわりと外の刺激によってコロコロと変わるものです。その《コロコロ》が「心」の語源であるとか、心臓音を模したものだとか言われますが、いずれにしても1日に何十回、何百回と変わるもの、それが私達の「心」というものです。その絶えず動いている心の奥に、どんなに外界の刺激を受けても変わらぬものが存在します・・・私は、それを「魂」であると思っています。 「身心ともに」と言いますが、その相関係の根底で働いているものがある。要するに、その**命の根源が「魂」**ではないか？ということなのです。

在を、誰しも否定できないのではないかと思えます。

ちよつと科学的・哲学的なお話になりますが、私達の体は全て酸素、炭素、水素などの元素から成り立っていて、それらは全て地球上の元素からできています。そして**寿命が尽きたら（時期が来たら）、この体をお返しします**。死後、私達の体の炭素は炭酸ガスになって、千の風になって地球上を吹きまわり、光合成として利用されます。ある意味、仏教で言うところの輪廻転生と言えなくもないですが・・・。

そう考えると、私達の寿命が尽きた後に「**お返しするこの体**」の本体は？命の根源は？つまり、この私達の体の貸し主である「大自然」にお返しすることになります。この大自然というのは、「宇宙」でも「天」でも表現は何でも良いと思いますが、とにかく私達の生命を生み出している大いなる存在である「**神さま**」や「**仏さま**」であることは間違いありません。

では借り主である「私達の命」の正体とは、一体どこなのでしょう？心は肉体と共にこの世から無くなるのですし、ましてや1日にコロコロと変わってしまう様な不安定な存在に貸すことにはないでしょう。そうなる

と、やはり個体が死んでも残る存在があると考えるのが普通だと思います。つまりそれが「魂」であり、「**真の私**」ではないかと思っています。

私達にとって肝心要である「**魂の源**」は目に見えませんが、触れる事もできません。ただ、だからといって無神論者を気取って下さっている「**魂の源**」に対して、あまりにも失礼ではないかと思えます。私達の命は、自分の力で「**生きている**」ではなくて、**命の源から「生かされている」**命なのだ、ということに自覚しなければならぬでしょう。

これも仮定の話ですが、「生かされている」私達の命の中には、「**祈り**」の遺伝子があるのではないか？と思えます。特に日本は「**神の国**」と外国から尊敬を集めています。確かに、私達の象徴である**天皇陛下の最大の務めは「祈る事」**でいらっしゃいます。そして**令和元年の今年**は皇紀**2679年**です。そんなに長い間、日本の為、世界の為に祈っている方が存在している国は他にありません。天皇陛下をいただいている事からして、「**祈り**」は日本の文化の特徴と言って良いでしょう。普段は大して信仰心もないのに

何千万人という人が正月になると精神と魂にかかわる神社仏閣で手を合わせるというのは、日本の1つの特徴でもあります。宗教を問わず初詣をします。数千万人も日本人が「**願い**」を「**祈り**」に変え、共に「**祈**」っているのです。人間の「**願い**」に神も「**乗れる**」祈りという事と、神の「**祈り**」に人間の意識が同調するということもあるのではないかと、次にご紹介する実話が雄弁に物語ってくれています。

### ▼【「ありがとう」が生んだ奇跡】

この物語の主人公は、**工藤房美**さんというごくごく普通の主婦で3児の母。昭和33(1958)年生まれ。房美さん48歳で子宮頸ガンを発症します。手術できないほど進行しており「**余命1ヶ月**」と宣告されてしまいました。しかし、その十ヶ月後、なんと癌は綺麗に消えてしまいました。壮絶な闘病生活と奇跡の快癒をまとめて上梓し、全国で講演活動に精を出しています。参考文献・著書・**工藤房美【「ありがとう」100万回の奇跡】**・**【「遺伝子スイッチ・オンの奇跡】**

いま思えばガンになる前というのは、ものすごく無理をしていたと思う。うちには息子が3人にて、家も新築に引越したばかりだったので、子育てや生活、お金の事など、どれも大きな問題でした。それに朝は3時に起きて夫や子供達のお弁当づくりに始まり、仕事は遊戯業の会社に長年勤めていて、早番と遅番の交代制で働いていた。特に遅番の翌日が早番だと、お弁当と朝食を作っていたら殆ど寝る間もなかったもので、生活のリズムはかなり乱れていた。当時は平均睡眠時間が2、3時間くらいだったと思うのですが、とにかく一所懸命だった。日頃から頑張るだけやってみようという気持ちには常にありました。でも体の方はきつと悲鳴をあげていたと思う。実際、体の具合が悪い日も何度かありましたから。ある日の事、職場で鼻血が出て止まらなくなってしまう。それも凄く勢いで。すぐに日赤病院に運ばれて、応急処置をしてもらったのですが、一刻も早い検査が必要だという事で、家から一番近い総合病院で診察を受けた。平成18年5月1日のこと。当時48歳。診察

台で横になっっている私の足を先生が思いきり叩きながら「君はガンだよ」と叫ばれた。「何でこんなになるまで放っておいたんだ」と怒られた時には、とてもショックで……。子宮癌でした。手術の前日に主治医から「とても残念ですが、あなたのガンは広がりすぎているため僕の腕は振るえません」と言われてしまった。私は一体どうなってしまうのだろうか、もう不安でいっぱいでした。それに細胞を取って検査をする際に血管を傷つけてしまったようで、出血が物凄くひどくなっていた。主治医が言うには、まず出血を止めるために血管に放射線を当てましょうと。それは1日1分、全部で30回の治療で痛みは無いという説明を受けた。ただ、その後「ラルス(遠隔操作式高線量腔内照射装置)」という、痛くて苦しい治療を3回しますと言われた。少し不安に思いましたけれど、手術以外にも治療方法があるのだと分かって、しかもそれが済めば一ヶ月後には家に帰る事が出来るというので、僅かながらも希望の光が見えたように感じた。放射線治療も後半に入ってくると、皮膚が火傷したような状態になって、とても痛かった。でもそれとは比べものにならないくらい

「ラルス」は本当に大変でした。治療当日、実施にどんな治療なのかについて事前に説明が無かったので、何の準備もせずに放射線室に向かっていたら、看護師さんが「タオルを持ってきて下さいね」と言うんですよ。私は首にかけたタオルを指さして「持っていますよ」と笑顔で答えたら、その看護師さんが「いえ、口にくわえるタオルです」と。もうその一言で、「いったい何が起ころのだろう」「きつとゾツとするような治療が今から行われるんだ」と不安が広がって、足が震えだした。治療としては子宮に直接放射線を当てるといふものなのですが、麻酔や痛み止めは一切使わないため、患者が一切動けないように診察台に固定するところから始まりました。その作業と治療用の器具の装着で約1時間かかりましたが、とにかく体をグルグル巻きにされて、最後に口にタオルを押し込まれました。そこから1時間にわたる治療が始まりましたが、もう痛いとか苦しいなんてものじゃない。でも、悲鳴を出そうにもタオルのせいで声も出ない。私はただその痛みを無防備に受け止め続けることしかできませんでした。溢れる涙を拭きたくても、それすらもでき

ない。治療が終わって、また1時間かけて器具を外してもらおうと車椅子に乗せられて病室まで運ばれました。完全に思考はショートして、もう何も考えたくない。そんな感じでした。そして時間が経つにつれて、こんな治療をあと2回も続けるのかと考えたら、もう治らなくていいから、そのまま消えてしまいたいと思えました。そんな時、村上和雄先生のご著書『生命の暗号』を読んだ。

合掌 副住職 谷川寛敬

(紙幅の都合により、この続きは来月号に掲載いたします。どうぞお楽しみに！)

